

【報告】『九州における近世城郭石垣について－筑前黒田家の石垣普請－』

佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査 市川 浩文

佐賀県社会教育・文化財課の市川と申します。佐賀県に唐津というところがございまして、そこに国の特別史跡「肥前名護屋城跡並びに陣跡」という遺跡がございます。いわゆる豊臣秀吉の朝鮮出兵にともなって造られた居城ですが、そこに併設されております「名護屋城博物館」というところで、石垣修理をはじめとした遺跡整備を少し担当し、その縁でこの比較研究事業に参加のお声を掛けていただいて、本日、石川県民の皆様にご報告をさせていただくという機会をいただきました。今日は、できるだけ写真や図を使いながら、皆様には普段見慣れている金沢城の石垣とどんなところが違うのだろうかというのを見ていただきながら、聞いていただければと思っております。



【九州における近世城郭石垣の変遷】

今日、私がお話するのは「九州における近世城郭石垣について」ということで、その中でも筑前黒田家の石垣普請ということでお話させていただきます。黒田家と言いますと、黒田孝高〔如水〕、皆様は黒田官兵衛という名前のほうがご存知だと思いますが、秀吉の軍師としても著名でして、城づくりの名手とも言われております。黒田孝高と、その息子の黒田長政、すなわち、黒田藩 52 万石の初代藩主ですが、その 2 人が関わったお城の城づくりを見ていき、前田家の城づくりと比較できるようなものを見ていただこうと思っております。

と言いましても、いきなり黒田家の話をしても分かりづらいかと思しますので、まず、簡単に九州における近世城郭石垣の変遷について概略をお話します。

九州において城郭石垣が導入されていった契機というのは、まず、豊臣秀吉の九州平定、いわゆる薩摩の島津との戦いなのですが、それを平定した後に、秀吉が初めて石垣だけで造った城郭というのを九州の要所に配置します。そのお城を造ったのが黒田孝高や小西行長、加藤清正といった、秀吉の子飼いの大名たちです。その彼らに各地の要所を押さえさせたということです。

小倉城とありますが、これは今の細川家の小倉城の下に古い石垣が出てきております。こういった石垣がその時期の小倉城だと思われます。それから八代の麦島城がありますが、これは小西行長が造ったものです。こういった石垣が発掘調査で見つかってきております。

次の契機となったのが、先ほどお話しました肥前名護屋城、いわゆる朝鮮出兵にともなう築城です。朝鮮出兵は文禄・慶長の役とも言います。これにと



※小倉城写真は北九州市芸術文化振興財団
埋蔵文化財調査室 提供

もなって肥前名護屋城、それから朝鮮半島の前線基地として倭城という日本式のお城を造ります。あるいは渡海するルート上に秀吉が朝鮮に渡っていくときの、実際は行っていませんが、行くときの基地として壱岐・対馬にも城を造っております。こういった普請に直接関わって、その技術を目の当たりにした九州大名たちが、最新の石垣構築技術を自分の城にも導入していくという動きがございます。まさにこの肥前名護屋城は、天下普請そのものであると言えると思います。

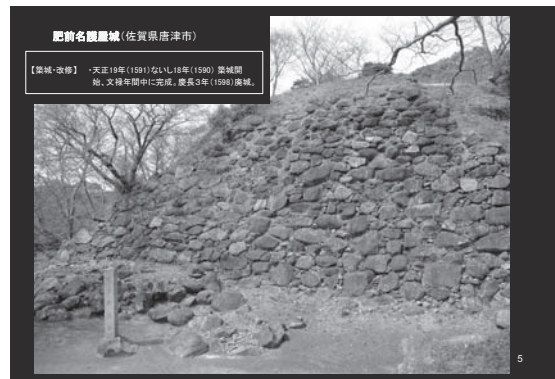
これが肥前名護屋城の石垣です。自然石で積まれておりますが、これとは別に矢で割った石だけで造られた石垣もあるということで、そういったいろいろな技術が、この普請にかかわった大名たちの持つ技術が随所に反映されているという意味でも、天下普請であったと言えるかと思います。

もう一つ例を挙げますと、これは長崎県壱岐にあります勝本城です。これも秀吉の御座所として造られたのですが、特徴として大きな石を立てております。いわゆる鏡積みと言いますが、こういうのは姫路城の豊臣期の石垣や甲府城、あるいは天正期や文禄期の豊臣家のお城の中ではよく見られる手法です。

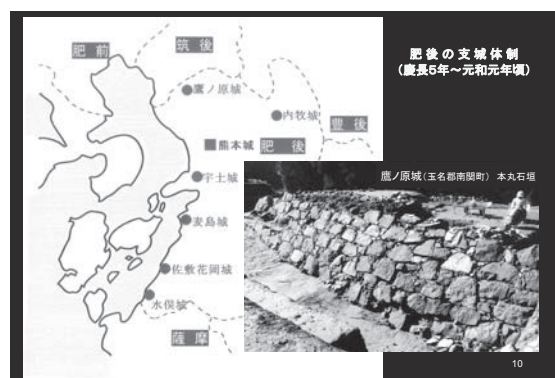
1600 年に関ヶ原の戦いがありますが、この戦いは東軍の勝利を持って一応の決着は見たのですが、まだ豊臣家は残っておりまして、情勢は極めて不安定でありました。九州でも徳川方、豊臣方それぞれの大名がいるということで、自分の領内をいかにして守るか、そういうことにかなり腐心したということがあります。政治・経済の中心としての自分の居城を整備する一方で、自分の領地を守るために支城を配置して防備を固めていきました。主に中世のお城を改造して、更に防備能力を高めていったという動きがあります。

関ヶ原の戦い直後ぐらいの九州の主な諸藩ですが、今日お話する福岡藩の黒田、熊本藩の加藤、小倉藩の細川という有力な大名がいて、南には薩摩藩の島津がおります。特に加藤ですが、熊本城を構築しながら、自分の領内の中世以前のお城を改造して支城化し、整備していきました。これは鷹ノ原城ですが、石垣を新たに積んで城郭としての防備能力を高めていくという動きが見られます。ただ大坂夏の陣が終わって一国一城令が出ますと、これも破却されていくことになります。

更に城づくりの停滞に追い討ちをかけたのが島原の乱です。1637 年、廃城されていた原城に一揆軍が立て籠もりまして、このお城を再利用することによって幕府軍が大いに苦戦します。このことを反省した幕府側からは、更に徹底した破却が指示されます。併せて新しいお城の築



※勝本城写真は壱岐市教育委員会 提供



城、あるいは既存のお城の改修においても厳しい規制が課せられます。このようなことから普請の機会が減っていきまして、寛永以降、石垣構築技術の維持、継承の意識が薄れていくということが見られます。このようなことで、寛文年間以降もいろいろ多彩に展開をしていく金沢城の石垣と大きな違いがあるということです。

付け加えになりますが、そういった動きの中でも、幕末になると外国船の脅威にさらされていく中で、沿岸の防備を強化していきます。ロシアの使節が長崎に来航するとか、フェートン号事件とかの列強からの接近がある中で、沿岸防備の強化ということで台場を設置したり、古い城を壊して新しい城を造ったというケースもあります。特に、長崎の台場とか佐賀の鹿島新城の例があります。ただここで見られる石垣というのは、石橋づくりとか築堤工事など、町石工の技術が多く活用されておりまして、穴生が活躍するような普請場ではなくなっていたということです。

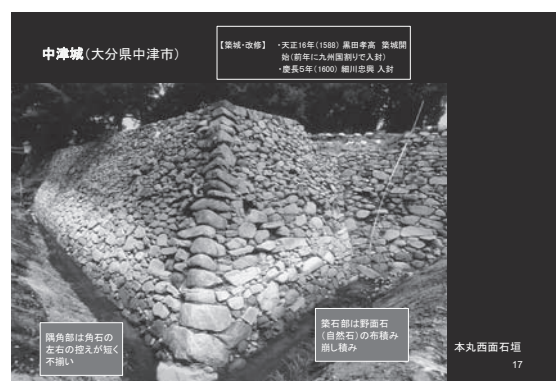
これは佐賀県鹿島市の鹿島城です。ご覧になれば分かるかと思いますが、間知積みという石垣です。これは長崎の台場、これも佐賀藩が造ったのですが、ちょっと崩れていることが新聞でも話題になりました。こういった石垣が造られていくという動きが見られます。

【筑前黒田家関連城郭にみられる石垣構築技術の変遷】

さて、そういった九州の流れを見てきたところで、黒田家関連の城郭石垣を見ていきたいと思います。まず、九州における黒田・加藤・細川家の位置付けをお話したほうがいいかと思います。当初お話したように、黒田・加藤家というのは秀吉の九州平定にともなって九州に入ってきて、最初の総石垣の城を造るわけですが、その後は肥前名護屋城でこの黒田家と加藤家、そして小西家というのが縄張り造りの中心的役割を果たしたと言われています。渡海した先では、倭城の築城においてもそれぞれ担当しています。

また、関ヶ原の戦いの後には、福岡藩、熊本藩、小倉藩でいち早く本城の整備に取り掛かっています。それと平行して、江戸城、大坂城、名古屋城などの天下普請にも参加しています。なかでも隅角部、角の部分ですね、それから天守台なども担当しています。慶長期から元和・寛永期にかけては、全国的にも高度な石垣構築技術を保持していたと言えます。

順番に黒田家の石垣を見ていきたいと思いますが、これは天正16年、九州平定後に黒田孝高が造った中津城です。これは算木積みとはなっておりません。左右の控えが短くて、不揃いな石垣が残っております。



もう一つ残っているものとして、こういった石垣があります。鉄門跡石垣と言いますが、ここではかなり大きな石を使っています。ただ、これは古代の山城に神籠石という石積みがありまして、その石積みを壊して転用しています。このように石が大きくなっているということで、先ほどの石垣とは違いが見られます。

中津城の黒田家の石垣としては、画面に書いてあるような特徴がありますが、いずれにしても左右の角石の控えも短くて、明確な算木積みにはなっていません。

この後におそらく肥前名護屋城の築城を担当すると思いますが、それと同時に倭城、朝鮮半島に行ってお城を造っております。倭城は今 30 数ヵ所残っておりますが、機張（キジャン）倭城を黒田長政が担当しております。

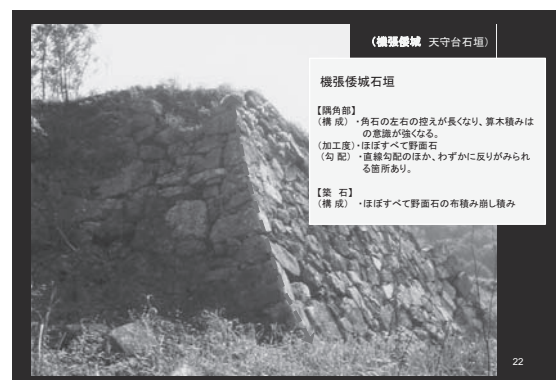
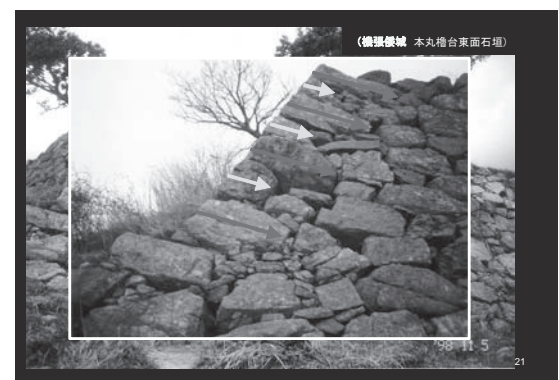
機張倭城は比較的によく残っておりまして、画面で白く見えるのが石垣で、一番高いところは本丸があるとところ。

石垣を少しアップにすると、矢を使った石というのはまだあまり見られてなくて、ほとんどが自然石を使っております。先ほどの中津城と比べてどうかということを見てもみますと、長い、短い、長い、短いということで、算木状に左右に引こうという動きが少し出てきております。こういったことで中津城から技術的に少し進んできたのかという感じがあります。

もう一つこれは天守台のほうですが、この画面で言いますと、この稜線のところが若干反ったような感じになっていまして、それまでは直線的な勾配で、中津城などでは直線的ですが、ここでは僅かにカーブを持つような石垣が見られます。これが中津城と比べて大きな違いだと思われ。

これから本城に話を進めていきます。福岡城です。慶長 5 年に黒田長政が福岡に入りますが、最初は名島城という小早川が造ったお城に入ります。その後、慶長 6 年から福岡城の築城を開始し、慶長 12 年、1607 年にほぼ完成したと言われております。ただ、明確な一次史料として、その記録は残っていません。

現在の地形と比べてみると、大濠公園というのは福岡城の外堀と連結していたということで



す。本丸に天守台があって、平山城の縄張りになっています。

福岡城で最初に造った石垣を福岡城Ⅰ期としておりますが、ここで使われている石は玄武岩、あるいは礫岩の自然石ばかりで、割石が若干含まれているぐらいです。一つの特徴として、ここも若干の反りが見られます。それも徳川大坂城のようなギュッとした反りではなくて、若干、真ん中より上の方で少し勾配の起きるような、こういった反りが見られるのが特徴です。

それから同じ石垣の下の方で、この左右の控えですが、ここも右・左きちっと引いています。いわゆる算木積みの意識というのがかなり高くなってきているというような状況が見られます。ただ、この特徴としてもう一つ、同じ石垣の上の方では算木積みになっていません。ほとんど控えが同じ長さになっています。下の方では算木積みになっていますが、上では控えが短くて算木状にはならないという特徴があります。

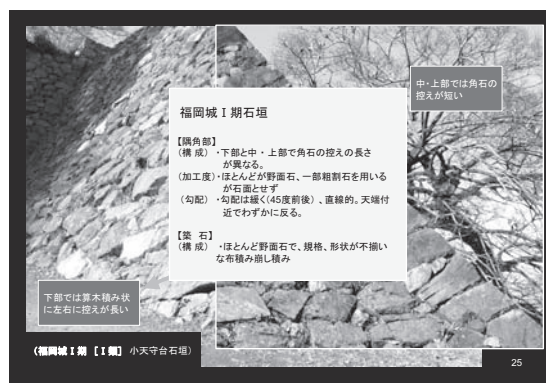
隅角部の下の方と上の方の造りの違い、それから若干勾配が起きる、反りを持つというのがⅠ期石垣の特徴です。

これは福岡城Ⅱ期。Ⅰ期から続けて造っていったと思いますが、Ⅱ期としている石垣では、角の角石、角脇石だけに花崗岩の割石が使われていて、他は自然石の積み方で角だけが違います。各面もちろんと矢で割った跡が残っています。ここなどは角脇石がしっかり入ってきているということで、算木積みとしては先ほどのⅠ期のものに比べて完成されてきているという状況があります。

これも同じⅡ期ですが、同じように角がほとんど花崗岩になってきています。角脇石には玄武岩が入るところもありますが、しっかり花崗岩が入ってくるところもあります。そしてここでも真ん中辺りから若干勾配が起きているという特徴があります。

Ⅱ期の石垣に関しては左右の控えが長くなって、明瞭な算木積みになり、角脇石を持つようになる箇所もあるというところが、Ⅰ期との大きな違いと言えます。

これは福岡城Ⅲ期としておりますが、こちらになると一面白っぽい石になっています。ほとんどすべてが花崗岩に変わっていつております。ここでも若干勾配が起きているような感じが



あります。反りの具合というのはⅠ期・Ⅱ期とあまり変わりませんが、全体的な勾配としては、かなり立ってきているという様子が分かります。隅角部に関しては、しっかりと角石と角脇石を配置するという使い方をしております。その結果、長さが揃ってきています。要するに、角石の終わりと角脇石の終わりがなんとなく揃ってくるので、これを目地と言いますが、境目がはっきり見えてくるという特徴があります。

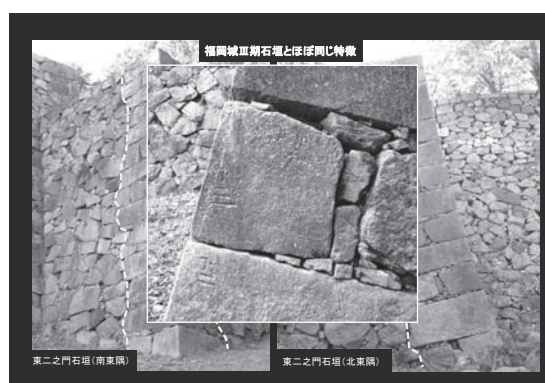
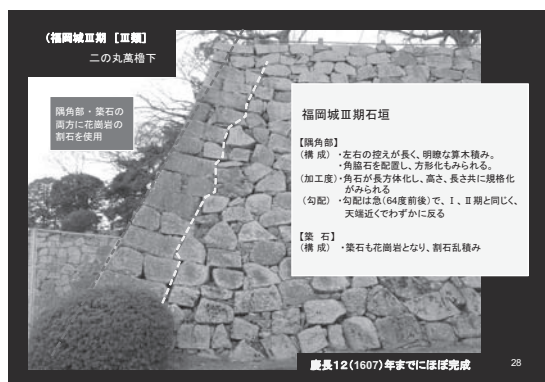
Ⅲ期のお話をしましたが、福岡城が慶長12年、1607年に大体築城が完了していると考えますと、Ⅲ期の石垣の下限というのが1607年ぐらいだと思います。これと比較する資料として、尾張名古屋城の黒田家の普請丁場があります。お配りしたパンフレットの最後にも尾張名古屋城の写真がありますが、本丸の右側に2番と書いてあります。そこが黒田家の丁場ということになっています。

これも福岡城Ⅲ期の石垣とよく似ておりまして、全て割石で構成されており、角の部分の感じもよく似ております。ここでもこのような感じで、角石の終わりと角脇石の終わりが大体揃ってきて、こういう目地が通っています。福岡城Ⅲ期とちょっと違うところというのは、角の石をかなりノミでたたいておりまして、表面が調整されているという点ですが、基本的構成はよく似ています。

尾張名古屋城の普請が慶長15年ということですので、福岡城Ⅲ期と尾張名古屋城の石垣というのは大体近い時期の構築だと言えます。

それから少し間をおきまして、徳川大坂城の普請を担当しております。先ほどお話がありましたが、ここでは熊本の加藤家の隣の丁場の隅角部を担当しております。ここでも、はっきりと目地が分かれておりまして、そういった特徴というのは尾張名古屋城から継続して持っています。角石も角脇石も切石状になっています。ただ、築石は大体石の形は似ているのですが、大きさが大小様々あって、まだ古い様子を残しています。横から見ても境目がはっきりしているということです。

大坂城1期の黒田家の石垣ですが、黒田家は2期、3期も担当しておりまして、それを見ると、角の部分というのはあまり大きな変化はございません。こちらが2期、こちらが3期です



が、3期で角脇石を二つ置くようになるという動きもありますが、それ以外はあまり角の部分の違いはありません。

先ほどもお話がありましたが、築石部分で3期になると、使われている石の高さが大体揃ってきます。規格材になってきますので、横にずっと目地が通る布積みという積み方になってくるところは、他の3期の丁場と変化は同じです。

【筑前黒田家の石垣構築技術の特徴】

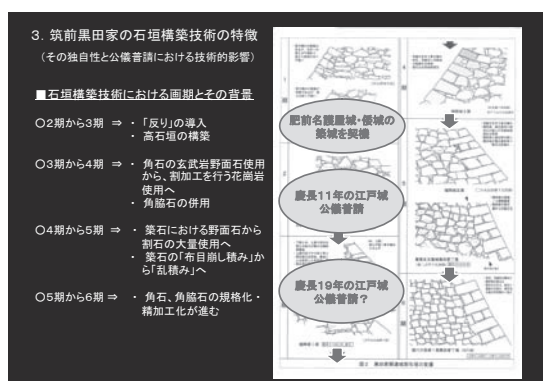
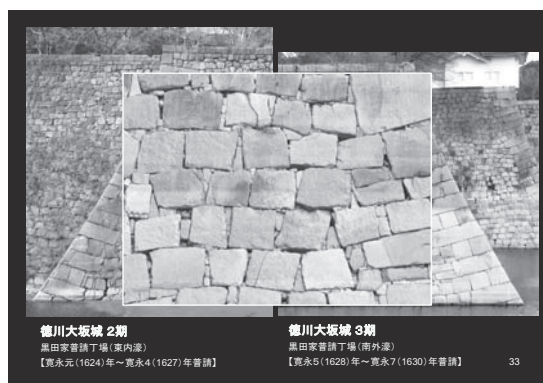
今お話してきました黒田家関連城郭の特徴というのは何か認められるのかということですが、お手元のパンフレット 13 頁を見比べながらお聞きいただきたいと思います。まず、黒田家が幾つかの公儀普請に参加している中で、おそらく影響を受けたと思われる石垣技術の画期があります。私が今話してきた中で、中津城を1期、機張倭城を2期、福岡城Ⅰ期を黒田家の3期、福岡城Ⅱ期を4期、福岡城Ⅲ期と尾張名古屋城が大体同じだということで5期と扱っております。それから大坂城については6期ということで、それぞれ石垣の特徴からこういうふうに区分しております。

2期から3期というのは先ほど申し上げましたが、反りが導入されてきています。石垣は高くなって、高石垣を構築するようになるということも言えると思います。それから3期から4期は、角の部分に矢で割った割加工を使った花崗岩を使う、角脇石を使うというような画期です。4期から5期に関しては、築石部がそれまでの自然石から割石をたくさん使うようになっていくという動きがあると思います。5期から6期に関しては、角脇石の大きさが更に規格化されて切石化していく、精加工化されていくという動きがあると思います。

それぞれの画期について、おそらく2期から3期に関しては、肥前名護屋城、あるいは倭城の築城を契機にしたのだろうというふうに考えられます。実際のところまだ分からないのが3期から4期、4期から5期に関してですが、これについてはまだ合理的な説明ができませんので、おそらく慶長11年、江戸城の公儀普請に参画したと大きく関連するのではないかと思います。慶長11年の江戸城の公儀普請では黒田家は天守台の築城、石垣普請を担当したということになっておりますが、その天守も現存しておりませんので、詳細は分かりませんが、そういった公儀普請との関連が考えられるだろうと思います。5期から6期に関しても、おそらくその後行われた江戸城の公儀普請と関連するのではないかと考えております。ただ、これは今後まだ検討していく必要があろうかと思っております。

3期からは、顕著に現れてきます反りの導入があります。こういう反りを持つというのは、関ヶ原の戦い直後に各地にお城を造りはじめてからの段階で他に反りを持つのは、九州においては熊本城だけです。これも大きな特徴だろうと思います。

それから慶長後半期から成立していく、隅角部の築石部からの独立化。先ほどから何度も言っております、縦に目地が通る、いわゆる角石・角脇石と築石の境がはっきりしてきて、私は



独立化という言い方をしておりますが、そういった特徴が現れて、技術的な系譜として続くという点があると思います。

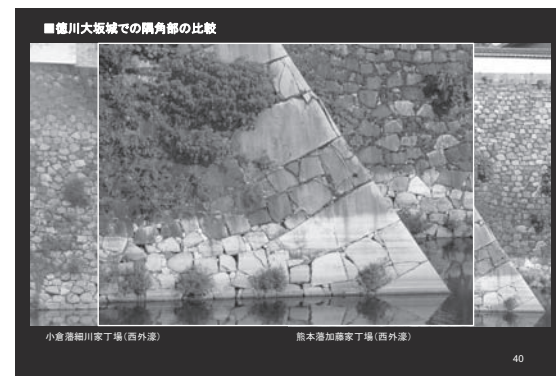
では、ほんとうにそう言えるのかということで少し見ていただきたいのですが、これが熊本の加藤清正が造ったといわれております熊本城の犬守台です。これは見てお分かりだと思いますが、非常に強い反りを持っております。それからこちらでも同時期の角だと思のですが、算木積みどころか、それぞれの角の控えが短いということで、算木積みを採用していません。こういう特徴があります。これが福岡城の犬守台とほぼ同時期だと考えています。

小倉藩の小倉城、細川家が築城したのですが、こちらに関しては勾配が直線的で、反りを持たない。それから左右の控え、角石もある程度右左に引いていまして、算木積みが上の方まで含めて完成しているという違いがあるということです。

先ほどから隅角部の独立化と言っておりますが、これを同時期に施工された尾張名古屋城の公儀普請の石垣と比較してみますと、これが黒田家の丁場と柳河藩の田中家の丁場ですが、この赤い線というのが角石のお尻の方で、黄色い線というのが角脇石と築石部の間の線です。この間が狭いほど独立化しています。間が開いているということは、角石が角脇石のお尻よりも長く引かれていることを示しています。田中家はかなり空いていまして、黒田家の丁場に比べて角石の方が長くなっているということです。

同じような比較ですが、高松藩の生駒家と姫路藩の池田家の丁場でも間がかなり空いています。黒田家の丁場とはかなり違いがあるということがわかります。

徳川大坂城ですが、これは細川家の1期の丁場です。見て分かるように大きく角石を引いて、角脇石がここで止まっているということで違いがあります。こちらは同じく加藤家の丁場ですが、これも一目瞭然で、全く角部の造り方が違います。一見すると不揃いと言いますか、長方体にはなっていないのですが、大きな巨石を配置するということが、大坂城1期の熊本・加藤家の特徴として見られます。黒田・加藤・細川という三者の石垣も徳川大坂城でもかな



り違うということが言えると思います。

ちなみに前田家の丁場ですが、左が尾張名古屋城のもの、右が徳川大坂城のものです。同じようにラインを入れてみますと、割と揃います。角石のお尻と角脇石のお尻が揃うという、隅角部が独立化していくという傾向は、前田家の丁場でも、前田家の石垣構築技術のなかでも一つの特徴と言えるのかと思っております。

【筑前黒田家と公儀普請】

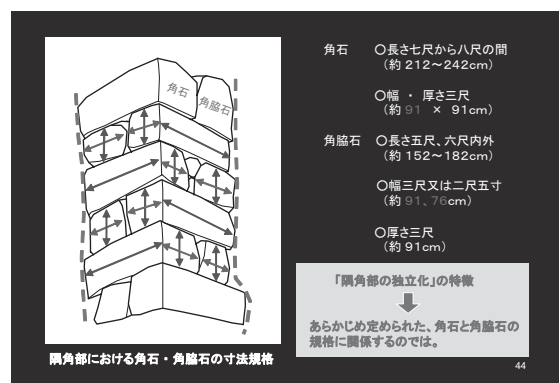
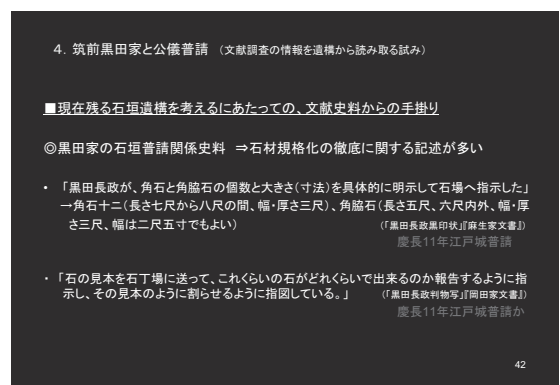
最後にまとめというわけでもないのですが、筑前黒田家と公儀普請ということで、文献調査の情報を遺構から読み取る試みと題してお話します。私は遺構の調査をしています。もう一方の文献班の方も、石垣普請に関わる多くの調査をされていて、いろいろな手がかりを示していただいております。

その中で黒田家に関してもたくさん紹介されていてまして、特に石材を規格化していく、徹底していくという記述が多いです。例えば、黒田長政が角石と角脇石の個数とか大きさを具体的に明示して石場へ指示しています。これは慶長11年の江戸城普請だと思いましたが、こういった指示をしています。それから石の見本を石切丁場に送って、「これぐらいの石がどれぐらいできるか報告しなさい」と言って、見本のように割らせるよう指図しています。

一方、丁場にいる家臣に対して、「割石について1日にどれぐらい作れるのか、見積りをして報告しろ」と言うこともあります。また、「角石のお尻は念入りにきちんと切りなさい」と言うこともあります。これは規格というよりも石自体の安定性に配慮しなさいといった視点だと思いますが、こういった史料も残っています。つまり資材、この場合は石材ですが、管理したり、施工監理する石垣の全体の安定性・強度をしっかりと確保しなさいということに対して、黒田長政から直々に指示がたくさん出ております。

その中で一つ実験的に見てみたのですが、先ほど、長政の角石、角脇石の大きさに関して、いろいろ指示があるというお話をしました。慶長11年の江戸城普請だと思いましたが、「角石に対して長さ七尺から八尺の間、約212cmから242cmぐらいにしなさい、幅とか厚さに対しては3尺ぐらいにしなさい」、それから「角脇石の控えは5尺から6尺にしなさい、幅については3尺から2尺5寸にしなさい、厚さについては3尺にしなさい」というような細かい指示が出ております。

この通り積むと、石垣を積むときはこの間に小さな石を入れたり、石の形に合わせて少しずらしたりしますので、角石と角脇石の境というのはラインが入ってしまいます。結果的にこれ



も私が先ほどから言ってきた独立化、隅角部の独立化といったことが、こういう形になるということで、こういった石材に対する予め定められた角石とか角脇石の規格に関する配慮というのが、ここに現れているのではないかと思います。これが隅角部の独立化という特徴に現れているのではないかと思います。

公儀普請から読み取れる黒田家の石垣普請の特徴としましては、そういった石材を調達する段階で、その規格とか形状を厳密化することによって、実際の工事の効率化を図ると同時に、それだけではなくて、石垣が壊れないようにしっかり配慮するといった考え方が現れていると思います。

黒田家の石垣普請の特徴というのは、公儀普請に当たって石垣の構造体、全体としての強度の確保と、現代的な言い方をしますと、効率的な施工によるコストダウン、あるいは工期を短縮していくことを両立させるということに配慮していたことです。それが慶長 11 年の江戸城普請という早い段階から、そういう視点を持って石垣普請を行っていたというふうに言えるかと思っています。

これは黒田家の大坂城石垣普請の石切丁場の様子です。小豆島にありますが、赤色の点線部分に丁場が広がっております。その中で刻印が見られるのですが、大坂城の 2 期のなかにも同じ刻印が見られます。

慶長 11 年に細かい石材の規格に対する指示が出ていたと申し上げましたが、この大坂城普請においても石材に対して細かい規格がありました。この数値の単位は cm ですが、こういった同じような大きさの石材がここにたくさんありまして、長さについても、大体 270 cm から 290 cm 前後のほとんど同じ規格の石がたくさん山中にあるということです。こういった石材の規格に対するこだわりというのは、大坂城の築城に当たって更に追求していったということが黒田家の石垣普請の特徴としていえるかと思っています。

これで発表を終わります。ご清聴有り難うございました。

